奈良教育大学広報誌

Nara University of Education
SPRING 2008

むらさき

春
2008

ならやま 2008年春号

CONTENTS

3【学長コラム】
卒業生・新入生へのメッセージ　学長　柳澤　保徳

4【特別座談会】大学時代を振り返って

8【大学の取り組み】
教育課程開発室の取り組み　理事・副学長（教育担当）　重松　敬一
学長補佐（教育課程担当）・教授　森本　弘一

9 平成19年度フレンドシップ事業　フレンドシップ事業担当者・准教授　梶原　篤

10「地域と伝統文化」教育プログラム　プログラム実施担当者・特任助教　青木　智史

12「世界遺産教育」の合同実践研究会の開催
―ユネスコ・スクールとしての地域貢献―　国際交流・地域連携委員会

13 写真で見る大学120年　その1　明治期

14【ラボレター】
酔歩と超群　― 調和解析 ―　数学教育講座・教授　河上　哲
「自分で問い、考える」ことの難しさとおもしろさ　社会科教育講座・准教授　伊豆藏好美
作曲家であることを生かした教育　音楽教育講座・准教授　北條美香代
身体に良い油脂を安全に摂るために　生活科学教育講座・准教授　杉山　薫

16【ひと・あれ・これ】
顧問一年生　奈良市立富雄中学校・教諭　大西　佐知
パワーの源は、子どもたちの笑顔　奈良市立富雄第三小学校・教諭　藤田圭衣子
鳴り止まない電話の中で　京都市児童相談所・児童福祉司　稲垣　紀夫
ステップアップを目指して　京都銀行久津川支店　溝口万里子

18【附属校園では】
幼稚園　ひとりひとりが輝く保育をめざして　附属幼稚園・副園長　上野由利子
小学校　みんなの学校　― 教えと学びの公共性を求めて ―　附属小学校・副校長　坂下　伸一
中学校　ＥＳＤの理念の実現に向けて　附属中学校研究推進部・教諭　竹村　景生

20【大学の仲間たち】
アカタテハ　自然環境教育センター長　前田喜四雄

表紙紹介

講　堂

講堂は、大学の正門を入ると真正面に位置しており、創立１００周年にあたる昭和63年６月に建設されました。古代奈良建築の剛放さをとりいれた日本風表現になる洋式建物であって背景との調和とギャラリーとしての機能には格別の配慮がなされています。

この講堂は、入学式・卒業式等の大学の式典諸行事をはじめとして、特別講義、講演会、公開講座、課外活動、諸学会、研究会等広く教育研究の発表の場として使用され、近隣地域の社会教育活動にも利用されています。学生からは外観がパルテノン神殿に似ていることからパルテと呼ばれています。

平成20年11月22日には創立１２０周年記念式典を開くことになっています。

主な施設内容
建物面積　1，080㎡
座席数　567席
舞台・客室
エントランスホール
控室・ホワイエ・ピアノ庫

表紙題字　名誉教授　池田桂鳳

THE PRESIDENT COLUMN

卒業生・新入生へのメッセージ

柳澤　保徳
奈良教育大学 学長

春を迎え、卒業・修了と入学の季節がやってきました。学部卒業生の皆さん、おめでとう。皆さんが入学した四年前は、国立大学から国立大学法人に変わった年でした。つまり今年度の卒業生の皆さんは、国立大学法人奈良教育大学の第一期生となります。

戦後、「第一期生」と呼ばれる卒業生は、少なくとも三つの世代にわたります。最初が師範学校から学芸大学となった昭和24年度入学の奈良学芸大学第一期生、次に大学名称が教育大学と改称された昭和41年度入学の奈良教育大学第一期生、そして国立大学法人となった平成16年度入学の皆さんです。昭和40年代の卒業生は、団塊世代の大量退職と称されるように、次第に社会の第一線を退きつつあります。教育界に限らず、若い皆さんへの社会からの期待はいやが上にも高まらざるを得ません。その期待にぜひ応えて欲しいと思います。

法人化後は、「教育の質と内容、方法について、常に学生のことを第一に考えましょう」と教職員の皆さんにお願いしているのですが、年を追うごとにその成果に確かな手応えを感じています。大学教育は、「教員が何を教えたか」ということよりも、「学生が何を学び、どのような力をつけたのか」という『大学での学びと育ち』を重視する方向に変りつつあります。学部での教育改革も、このような流れの中で行われつつあります。

最近、「学士課程教育の質の保証」という言い方がされるようになりました。とりわけ教員免許という資格は、狭い意味の成績と単位取得だけではなく、学生の皆さんの自発的な学習の成果である、「どのような力を身に付けたのか」ということと密接に結びついています。そのことをどのように確かめる（検証する）のか、奈良教育大学ではその仕組みづくりに取り組んでいるところです。

また本学では、平成20年度から新しく教職大学院がスタートします。「専門性と実践力を兼ね備えた教員」の養成に向けて、地元教育委員会や小中学校との連携による理論と実践を融合した教育により、修了時の資質能力を保証できるような教育課程を用意しました。

新入生の皆さんは、卒業後の自分を思い浮かべながら、学士課程四年間の学びを、自分なりに構想されるといいでしょう。例えば、この授業の目標は何か、何を学ぶのかについてしっかりと理解しましょう。実は、目標が定まれば、道は半ばまで進んだと言っても過言ではありません。先日、卒業予定者の学生の皆さんとお話しする機会がありましたが、入学と同時に卒業後の将来イメージを持つことの重要さが、異口同音に語られました。さまざまな経験を経て、在学中に変わることがあっても構いませんが、ぜひ自分の目標を持ってください。

さて、奈良教育大学は、大学としての歴史はほぼ60年ですが、教員の養成という使命を考えれば、明治21年創設の奈良師範学校をその前身としています。今年は、師範学校の開校から数えて120年の節目の年を迎えます。

同窓会や後援会の皆さんのご賛同を得て、今秋には120周年記念行事を計画しています。単なるセレモニーだけではなく、新しい飛躍の契機となるよう、大学全体の取り組みにしていきたいと思います。

特別座談会

大学時代を振り返って

この春、奈良教育大学を巣立っていく皆さんと、柳澤学長が対談しました。大学(院)時代の思い出や進路サポート、そして在学生・新入生に対するメッセージなどを熱く語ってもらいました。

まず学長から、卒業される皆さんへのメッセージをお願いします。

柳澤学長　4回生の皆さんは平成16年入学で、国立大学法人奈良教育大学の1期生になるんです。法人になる前と後でそんなに変わっていないと思うんですけど、先生方や職員の心構えと言うか、学生諸君に対する向き合い方の親密度がさらに増したのではないかと期待しているんです。

皆さんは卒業後の進路が決まっていて、それは努力の結果だと思っています。本当におめでとうございます。いよいよ社会に出て自分の夢を切り開いていくという、人生の非常に華々しい時期であり、希望を持って進んでいただきたいと思っています。「皆さんの将来に幸あれ」と最初に申しあげて、いろんなお話を聞かせていただければと思います。

大学で学んだこと、取り組んだこと

皆さんは入学された当初、または入学後、奈良教育大学についてどのような印象を持たれましたか？また、どのようなことを学ぶことができましたか？

井上　大学に対する入学前の印象は、人がいっぱいいてキャンパスも広くて、中庭でバトミントンして（笑）…みたいなイメージがあったんですけど、奈良教育大学を見た時、最初は「小さいなあ」と思いました。でも規模が小さくて少人数だからこそ、顔を知っている人ばかりで、仲を深めやすかったですね。

あと、少人数の授業も印象に残っています。英語をきれいに発音してみんなの前で発表するという授業なんですが、とても厳しくて何回も落とされました。仲間と家に集まって練習しながら、最後は何とか合格できたんですが、その授業も少人数だからこそ、あんなにきめ細かく見てもらえたんだなと思います。

北山　私は、文化財の勉強がしたくて奈良に来たんですけど、大学4年間は、「文化財を保護していくためにはどういうやり方をしたらいいのか？」と常に考えながら生活してきました。第一線で活躍されている素晴らしい先生方から授業を受けられたし、奈良にはたくさん文化財が存在するので、肌で直接学べたというか、空気を感

▶ 出席者

総合教育課程
文化財コース
4回生

北山純子さん
（奈良市役所合格）

学校教育教員養成課程
理数・生活科学コース
4回生

市川洋子さん
（横浜市小学校
教員合格）

学校教育教員養成課程
言語・社会コース
2008年卒業

井上大悟さん
（奈良県小学校
教員合格）

大学院
教科教育専攻
保健体育専修
2回生

阿部 智さん
（大阪府中学校
教員合格）

大学院
教科教育専攻
理科教育専修
2回生

仲島浩紀さん
（帝塚山中学校・
高等学校教員内定）

総合教育課程
生涯教育コース
4回生

帯刀嵩史さん
（奈良教育大学
大学院進学）

じられたことが特に良かったと思います。

あと、日本の伝統的なものに興味があって華道部に所属していたんですが、人数は少なかったけどなかなか面白かったですね。また華道部を通じて、文化会という委員会にも関わっていたのですが、また違う活動が広がっていくところがあり、非常にいい経験になったかなと思います。

仲島　僕は、大学と大学院の6年間でいろんなことを学びました。できるだけ子どもたちと関わりたいという考えから、例えば地域の小学校・中学校に行って、子どもたちと理科の実験をするという企画を実現しました。他にも、附属中学校の先生に声をかけていただき、科学部のロボットコンテストのコーチとして1年ぐらい関わって、オランダの世界大会までついて行きました。

そういう活動を通じて、いろんな人たちと出会えたことが大きいですね。小中学校の現職の先生と知り合ったり、企業の人や第一線の研究家と話したりできる機会もあって。そういう人たちといろんな話をすることで自分の教養が増えてきて、子どもたちにもいろんなことを語れる経験がいっぱいできたと思います。

大学・大学院時代に一番力を入れて取り組んだことや、一番心に残っている思い出などについてお聞かせください。

市川　私は陸上競技部に所属して4年間活動していました。中学・高校と陸上をやっていたのですが、浪人している1年間は全くやっておらず、「自分ができるんだろうか？」という不安がありました。入部したら人数が少なくて、女子部員が私の学年では1人だけ、しかも指導者もいない状態でした。

授業もありボランティアなども行っていた中で、週5日間練習していたんですが、部員ひとりひとりがそれぞれ目標を持って、自主的に取り組む部分が多かったと思います。いろんな大会で、自分の目標を持ってチームで戦っていくことによって、仲間とのつながりができたと思います。

柳澤保徳学長

帯刀　「大学生になったら、親の援助なしで全部自分でやる」と決めていたので、自分のやりたいことは絶対しようと思っていました。僕はスポーツ心理学をやりたかったんですけど、法人化に伴う改変でできなくなってしまいました。でも、どうしても勉強したいと訴え続けていたら、いろんな先生方に協力していただき、今春から大学院で学ぶことができるようになりました。もし他の大学で、学びたいことがすんなり学べていたら、そこまで熱心になっていなかったかなと思って（笑）。先生方が温かく見守ってくれたからこそ、自分から積極的に学ぼうという気になったのだと思っています。

阿部　僕の場合は、1年生の時の基礎ゼミで、飛鳥から大学までみんなで大ウォーキング大会をしたことと、去年その基礎ゼミのお手伝いで、京都駅からここまでウォーキング大会をしたことが一番の思い出です。それまで、コースの人みんなでそういうイベントをやる機会がなかったので、楽しかったですね。朝6時ぐらいから出発したん

ですが、さすがに疲れました（笑）。

あと大学院では、女子サッカー部の指導をしていました。女子の場合はまずほぼ全員が未経験からのスタートで、サッカーに対する知識もないので、口頭で指導してもわからないことが多いですね。教え方が非常に難しかったんですが、来年から中学校で多分クラブ活動を持つことになるので、その経験が非常に役立つかなと思います。

今のお話を聞かれて、学長は学生の皆さんに対してどんな印象を持たれましたか？

柳澤学長　皆さんの話を聞いていて、奈良教育大学のいいところが皆さんの中に凝縮されているな、という印象を持ちました。それぞれの専門分野で、「大学や大学院で何を学んだ」というのを持ちながら、それに加えて「これをやった」と主張ができるということは、本当に育て甲斐のある、しっかりした学生諸君が多いのだな、と率直に思いました。

大学の進路サポートについて

進路に対する大学からのサポートについてお聞きします。また、「もう少しこういうサポートをして欲しかった」という意見があればお願いします。

井上　僕は教員採用試験を受けたんですけど、大学で何回かセミナーや模擬試験を受けて、それがすごく役に立ち、身についたと思います。

それと試験当日、会場の門の前で大学の職員の方が「がんばれ！」と書いた横断幕を持っていたので、僕が寄って行ったら、キットカット（きっと勝つ）をくれました（笑）。他の大学だったらそこまで熱心になってくれないだろうなと思って、ちょっと恥ずかしかったけどうれしくて、頑張ろうと思いました。

阿部　僕が4回生の時に、教員採用試験を受けた時から、大阪府の方で2年間猶予してくれるシステムができ、運よく受かったのでそれを使わせていただきました。卒業後の進路が見えた上で大学院に進学したので、「自分は修了したら教師になるんだ」という意識が強くなり、何事も「教員になる」ことを念頭において取り組むようになりました。

大学の時はあまり深く考えずに過ごしていたんですけど、大学院では「もし先生だったらどうするんだろう？」と考えるようになりました。先が見えた上で進学できる制度は、思い切り勉強ができるという利点もあって、僕としては非常にありがたい制度だったと思います。

仲島　大学の先生方や教育委員会の方など、すごく偉い先生が講演に来てくださる場があったんですけど、もっと年齢の近い身近な先輩が、後輩に語りに来る場があってもいいのかなと。新任教員として半年や1年経った時に、自分が気づいたことを学生たちに語ることで、現場の空気みたいなものを聞ける機会があればいいなと思います。

逆に、大学には知的財産がいっぱい集まっているので、第一線の大学の先生のお話を教育現場に持ち帰ることもできるだろうし、お互いのためにもいいのかな、という気がします。

以上のお話から、就職や進路について学長ご自身が考えておられることは？

柳澤学長　最初に、法人化になって大きく変わった1つが、就職支援室を設けたところにあると思います。オフィスを設けたこともあるし、模擬面接を含めて対応してきました。教師や一般の就職、公務員もそうなんですけど、学生諸君の夢を叶えるために、先生方には授業はもちろん、それ以外の場でも力を入れていただいています。学生諸君の進路についてはなるべく早く報告してもらって、改善したい課題があれば、先生方と職員とが連携する形で、就職支援室がパートナーとしてしっかりと対応していきたいと思っています。

皆さんの今の話を聞いていると、かなり早い段階で自分の進路を決めており、それに対して、大学からの適切なサポートができているなと思いました。

就職の対応以外で、法人化に伴って大きく変わった点は？

柳澤学長　国立大学当時は国のお金ですから、学生に会計まで任せることはあり得なかったんで

すが、その点は遥かに自由になったと思いますね。

学生諸君が「こういう企画をやりたい」とプログラムを提案してきた時に、学内で審査をして認められれば、それを財政面も含めて支援しています。学生諸君のニーズや希望に応じて、企画力・実行力・実践力を自分たちで高めていくような工夫をしています。

新入生へのメッセージとこれからの奈良教育大学

最後に、卒業・進学される皆さんから、後輩の在学生や新入生に対するメッセージをお願いします。

帯刀　僕もまた大学院に進学する身なのですが（笑）、「教師になりたい」と思って来て欲しいと思いますね。これだけ熱心に指導してくれる先生がいる大学なので、本当に教師になりたい人がいっぱい合格してくれたらいいなと思います。また、そういう意欲を見る入試制度もあって欲しいと思いますし、入ってくる人も、教師を目指して4年間、精一杯頑張って欲しいと思います。

市川　1回生の時に先輩から、「自分から動かなかったら、何もしないまま4年間が過ぎちゃうよ。やりたいことはやっておきなさい」と言われました。本当にその通りで、勉強一つにしても、高校までのように人から「やれやれ」と言われることがないので、自分から積極的に勉強しようと思わなかったら、そのまま終わってしまいます。サークルや部活、ボランティア、バイトなど、意欲を持って動いて欲しいなと思いますね。

北山　卒業する時に後悔のないような大学生活を送って欲しいと思います。私自身やりたいことはまだ残っているんですけど、とりあえず後悔のない4年間を過ごせたというのが自分の中ではあります。卒業してから後悔しても、取り返しがつかないし解決策もないので、自分が後悔しないように過ごしてもらえたらいいなと思います。

柳澤学長　社会からこれだけ教師に対する厳しい批判があり、先生はかなり厳しい状況に立たされているんですが、入ってこられる方は、より強く「教師になりたい」という意欲を持って、本学を目指して欲しいと思います。奈良という独特の時間の流れ、文化環境というものがベースにあるので、少人数教育であったり、奈良の環境を生かした授業であったり、いろんな特色ある教育を用意して、新入生を迎えたいと思っています。

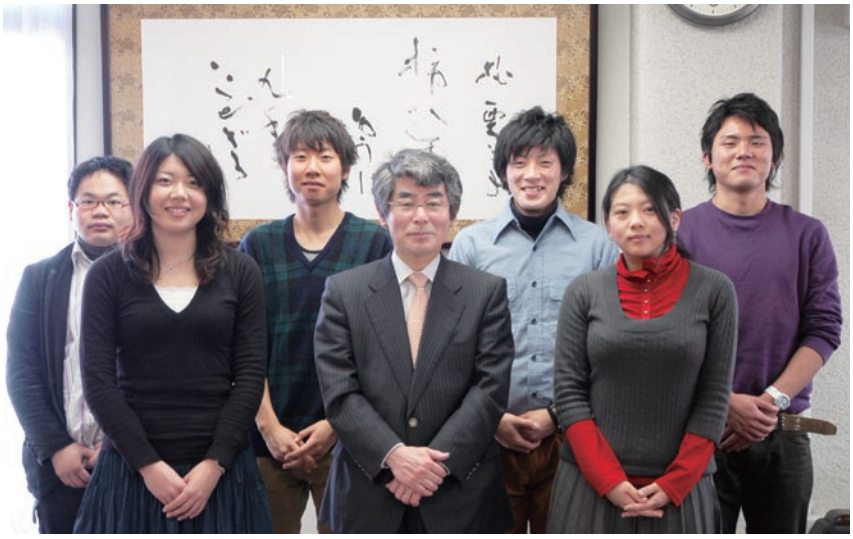
今後、大学としてやってみたいことや夢などについてお聞かせください。

柳澤学長　奈良教育大学を巣立っていく人たちのネットワークができたら…と思っています。皆さんのキャリアサポートをもう少し幅広くできないか。大学院に行けなかった人も、現職教員になってから大学院に行くべき時代になっているのだろうと思います。

学校教育の現場は、常に最先端の課題を背負っています。それに現場で対処するのはもともと無理な話で、現場の課題に教師が接して、それを大学が引き受けて教員養成に反映させる訳ですから、3～5年遅れてしまう。そういう意味で、教員になられる皆さんは、学校で困っている課題などを、とりあえず指導教員の先生に伝えていただきたい。

10年経ったら子どもたちが気質も含めて変わってくるので、それに対応しようとすると、教師は経験的に学ぶしかない訳ですよ。そうではなくリアルタイムに、大学と共同の研究と言うか事業ができればと思うんですが、その時に卒業生がみんなバラバラになってしまっていたら、もったいないですよね。研究的な、OB・OGの集まりがあればいいなと思います。大学にはある種の知的財産がある訳ですから、それをもっと自由に活用できるようにしていけたら…と思いますね。

ありがとうございました。
皆さんの卒業後のご活躍に期待しています。



教育課程開発室の取り組み

理事・副学長（教育担当）　重松　敬一
学長補佐（教育課程担当）・教授　森本　弘一

現在、教育課程開発室は、重松副学長、森本弘一教授、松井秀史客員教授、棚橋尚子教授、前田広幸准教授、吉田泰彦教務課長、奥野好幸副課長を構成員として、週一回定期的に議論をしています。教育課程開発室が関係しているいくつかのプロジェクトを紹介します。

■カリキュラム・フレームワーク

この取り組みは、前副学長　上野ひろ美教授、前学長補佐　小柳和喜雄准教授が構想され、始められたものを受け継いでいます。学生が、七つの目標資質能力基準【知識と実践力】を獲得するために必要な、教育システムの開発に取り組んでいます。本年度はプロジェクトチーム内だけの取り組みでしたが、平成20年度からは多くの教員の参加を募る予定です。現在の構想では、カリキュラム・フレームワークは、ティーチングガイドシステム、ラーニングガイドシステム、パブリックコミュニケーションシステムの三つから構成されています。

カリキュラム・フレームワークは、授業改善と学生の学習改善に役立つことが期待されています。

■教職実践演習

教職実践演習は、平成23年度から四回生を対象として実施されるものです。目的は、卒業までに教師として必要な能力が身についていることを確認することです。

多くの大学でモデルが作られつつあります。本学では、今年度は対応力を中心として試行を行いました。奈良市立椿井小学校、済美小学校、帯解小学校で、学生が三週間実習を行いました。教育実習では主に教科指導について学びますが、ここでは学級経営や児童理解、安全教育、保護者の対応、同僚関係などを学びます。参加した学生達は、大学で学んだことを実際の場面でどのように生かすことができるのか、四月から学級担任を持つにはどのような準備が必要であるか、などを知ることができたようです。

■教員免許更新制

平成21年度から、35歳・45歳・55歳の教員を対象に、教員免許更新制が始まります。本学を中心として、奈良県下の大学の協力を仰ぎ、教員免許更新のための講習を実施する予定です。

講習は、5月以降12月の土曜・日曜、夏期休業中に実施される予定です。内容は、必修科目と選択科目に分かれています。全部で30時間の講習が義務づけられており、科目ごとに認定試験を実施します。

奈良県だけで千人程度の受講生が見込まれることから、大学全体で取り組む必要がありそうです。講師の割り振りや教室の割り当て、教材の準備など、考えていかなければならないことがたくさんあります。

■その他の取り組み

教育課程開発室の室員は、カリキュラム・フレームワーク、教職実践演習、教員免許更新制それぞれに関係しています。これら三つは、密接な関係があるからです。

その他には、教養科目の構成の見直し、小学校英語導入に対する対策、四年間を見通した教育実習のあり方、近畿四教育大学の単位互換などを議論しています。議論して方向性がまとまってきたものを、教務委員会、教育企画委員会等で検討していただき、実施へと進めています。

Nue Cuffet

Nara University of Education
Curriculum Framework for Expert Teachers

1　学校教育の課題把握
教育の目的・歴史、人権、さらには教育や学校に関する法令などを理解し、現代的な教育課題を把握できる。

2　教科・領域に関する基礎的知識と教育実践への具体化
学校、中学校の教科内容とその系統性を理解し、教育実践に活用することができる。

3　情報活用能力
主な情報機器を利用し、獲得した情報を教育活動に具体化できる。

4　授業力

4.1　学習設計
学習指導計画立案に関する基本的事項を理解し、児童・生徒の発達段階に応じて作成することができる。

4.2　学習指導
多様な指導方法を理解し、児童・生徒の発達段階に応じた指導をすることができる。

4.3　学習評価
多様な評価方法を理解し、児童・生徒の発達段階に応じて用いることができる。

5　児童・生徒理解と教育実践への具体化
児童・生徒の身体的・認知的・情意的発育・発達に関する基礎的内容を理解し、教育実践に具体化できる。

6　学校と地域社会との連携
学校の組織的な教育活動や経営活動、地域の教育活動などに関わることの重要性を理解し、教育活動に生かすことができる。

7　職能成長
教師の仕事や役割、責任を自覚した上で、教師として自己成長する意味とその方法を理解し、自ら実践することができる。

７つの目標資質能力基準【知識と実践力】

試行「教職実践演習」の受講学生による発表風景

平成19年度フレンドシップ事業

フレンドシップ事業担当者・准教授　梶原　篤

■本学におけるフレンドシップ事業の概要

平成19年度もフレンドシップ事業を実施しました。

フレンドシップ事業とは、教員の養成段階において、本学学生が種々の体験活動を通して子どもたちと触れ合い、子どもたちの気持ちや行動を理解し、実践的指導力の基礎を身につけることを目的とした事業です。

平成19年度は、①夢化学21世紀－子どもとともに学ぶ理科教室－、②味覚をいかしたクッキング、③川上村で大歓声を!!、④書道を楽しもう、⑤古代探検－「集まれ★古代っ子！」、⑥救うロボコンと飛ぶ教室～奈良から始めるコンテスト～の6事業を実施しました。これらは2年次の「総合演習」などとして単位化され、本学の教育プログラムの一環を構成しています。どの事業も、近隣の小中学校から広く参加者を募り実施しています。各事業の詳しい内容は、毎年作成しているフレンドシップ事業報告書に載っておりますので、興味を持たれた方は、ぜひ目を通していただきますようお願いいたします。

■シンポジウム

毎年、すべての事業が終わり一段落した段階で、その年度のフレンドシップ事業全体を総括するシンポジウムを開催しています。本年度も平成20年1月17日木曜日、午後1時30分から四時間にわたり、本学の教育実践総合センター多目的ホールを会場として開催しました。重松副学長（教育担当）の挨拶に始まり、第一部は各事業を担当した学生による事業の実施報告で、各事業10分程度の時間の中で、実施当日の写真などを映しながら、代表の学生が簡潔に報告しました。

20分程度の休憩・ティータイムを挟んで、第二部は学生によるパネルディスカッションを行いました。主題は「フレンドシップ事業で学んだことと今後の発展のために－学生からの希望と要望についての討論－」とし、学生の自由な発言を求めました。

本来、フレンドシップ事業は学生のための事業で、学生自身がもう少し主体的に参加するようになった方が良いとずっと考えてきました。毎年のようにシンポジウムを開催して10年以上になりますが、年々学生自身が主体的に関わるようになってきております。第一部と第二部とに分けて開催するなど、形式はずっと踏襲されていますが、五～六年前のシンポジウムでは、第一部で報告するのは事業を実施した大学教官で、第二部は他大学のフレンドシップ事業の内容に関する講演会を開き、学生はほとんど参加しないという状況でした。第一部の報告を学生自身で行うように変えていき、後半の第二部もできるだけ学生自身で発言をする機会を増やすように徐々に変えていった結果、やっと現在の形式にたどり着きました。

学生からの発言・提言は年々活発になってきていて、「予算をもう少し使いやすくしてほしい、現金を使えるようにしてほしい」とか、「同じ半期15コマの授業なのに、楽な事業と大変しんどい事業があるのをなんと改善してほしい」といった意見が聞かれ今後の課題として取り組んでいくべきと考えています。

シンポジウムには本学関係者だけでなく、本事業の企画運営に協議会委員としてご協力いただいている学外の先生方にもご出席いただき、毎年貴重なご意見をいただいています。本年度のシンポジウムの際には、奈良市教育委員会の奥村浩一先生や、奈良市立富雄中学校長の福井敏雄先生から、学生たちに対して大変温かい激励の言葉をいただきました。さらに現職の教員で、現在本学大学院生でもある山野可奈子先生（本学大学院1回生　教育実践開発専攻　教育臨床・特別支援教育専修　特別支援教育分野／勤務先：生駒市立俵口小学校）には、特別にご出席を要請し、学生たちにご意見をいただきました。このような先生方のご発言は学生の心に深く残るようで、毎年ありがたく思っております。

フレンドシップ事業が、教員養成課程で学ぶ学生にとって役に立つ、実際の小学生や中学生、あるいは高校生を対象とした教育実践活動になるよう、今後とも内容を充実させ、発展を図っていきたいと考えています。

シンポジウムでの実施報告

「地域と伝統文化」教育プログラム

プログラム実施担当者・特任助教　青木　智史

■「地域と伝統文化」教育プログラムの取組

本学が位置する「奈良」は、我が国でも有数の伝統文化・文化財が根ざす地であり、古くは世界に開かれた国際的な文化交流の拠点でもあった所です。「地域と伝統文化」教育プログラムは、その豊かで広範に及ぶ奈良の伝統文化・文化財を基軸に、日本各地やその源流としてのアジア地域などの伝統文化・文化財との関連性を探り、同時にアジアを中心とする諸地域との異文化間の相互理解なども鍵として、大学院教育を充実させていくことを目的としています。

本教育プログラムは、大学院教育改革支援プログラムの一つとして採択され、大学院教育の実質化を目的に、平成19年度から3カ年度にわたって実施いたします。

本学ではこれまでも、伝統文化・文化財教育と異文化理解教育の二つの系において、優れた研究・教育の実績を積み重ねてきました。その二つの系を核として、全学に開かれた教育プログラムを実施していきます。実施初年度であった平成19年度は、皆様のご理解とご助力により、当初の予定通り遅延なく進めることができました。また現在、アジア各国の教育大学とネットワークを結ぶ「アジア教育大学国際交流ネットワーク」の構築を模索しています。今後も、皆様とともにプログラムを成功に導ければ幸いです。

■新たに展開される授業科目の紹介

本教育プログラムでは、共通コア科目、実践コア科目、深化科目を新規授業科目として展開していきます。昨年10月から開講している共通コア科目「世界の中の奈良」は、座学だけでなく実践体験や実地研修を重視し、伝統文化・異文化の教育力をこれまで以上に積極的に活用した授業科目です。授業で得た経験を生かして、院生が自発的に優れたワークショップを開発するなど、実質的な授業が展開されました。

平成20年度からは、実践コア科目「伝統文化発信法1・2・3」が新規授業として展開されます。この授業は、伝統文化を「学習」「理解」することに加え、その成果を「発信」することに重点を置いて展開されます。また、平成19年度は、従来から本学大学院で展開されている、「地域と伝統文化」に関連する授業科目を束ねた深化科目が50科目展開され、平成20年度以降もさらなる充実を目指して展開していきます。

■「地域と伝統文化」教育連続講座の開催

本教育プログラムでは、「奈良」という地域の特色ある伝統文化、またその源流としてのアジアに焦点を当てたテーマを取り上げ、学内外の専門家を講師として招いて行われる『奈良教育大学「地域と伝統文化」教育 連続講座』を開催しています。大学院生の知見を広めることはもちろんのこと、大学院教育に留まることなく、学部生や一般の方々にも広く開かれた公開講座としての性格も併せ持って

連続講座にて講義する北村昭斎氏

います。平成19年度から平成21年度末まで、ほぼ月に一回のペースで開催する予定です。執筆現在で四回の講座を実施いたしました。

連続講座第一回は「青磁からみる中国陶磁史」と題して筆者が、第二回は「螺鈿のはなし」をテーマとして「漆工（螺鈿）」の重要無形文化財保持者（人間国宝）である奈良在住の北村昭斎氏が、第三回は「アジアの中の頭塔」と題して本学准教授の山岸公基氏、そして第四回は「ペルシア文化の日本への流入」をテーマに大阪外国語大学名誉教授の井本英一氏を講師として招いて実施いたしました。それぞれ大学院生を中心に、学部生や一般の方々を含む多数の参加があり、最新の研究成果が紹介され、活発な意見交換が交わされました。今後も継続的に実施していく予定ですので、皆様のご理解とご協力、また積極的なご参加を期待しております。

■アジア教育大学国際交流ネットワークの構築

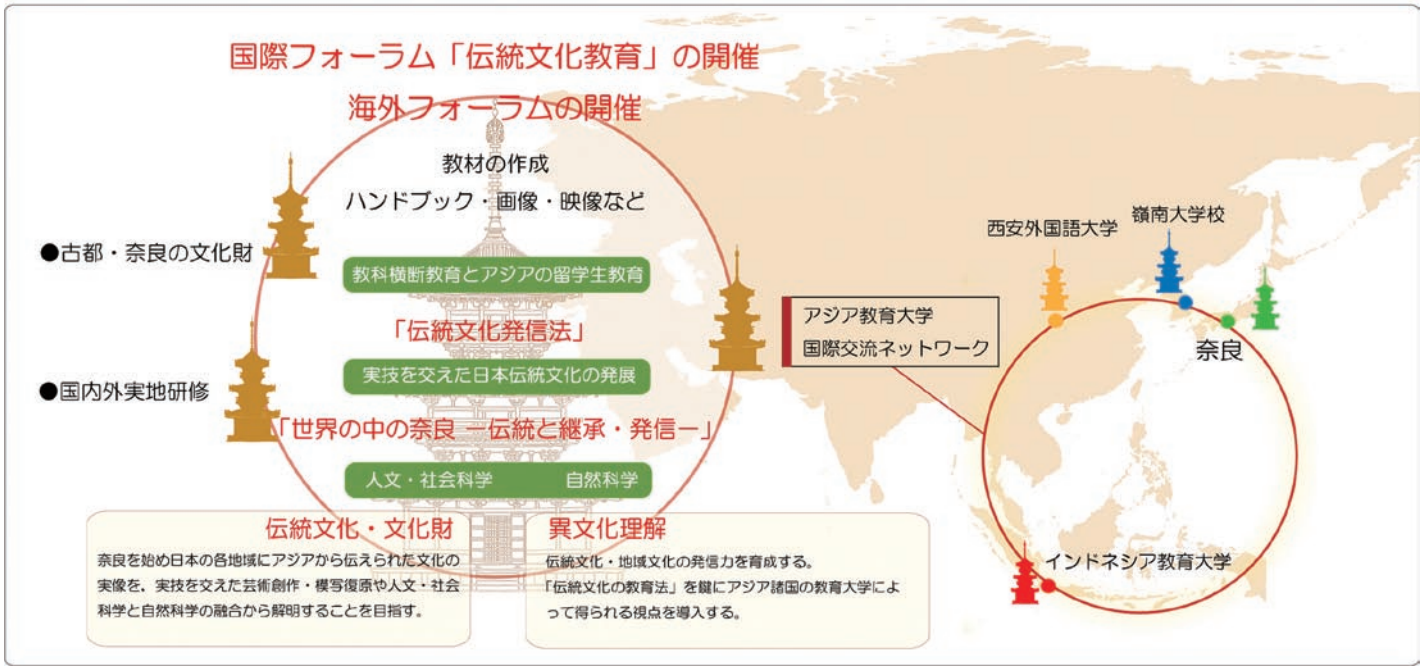
「地域と伝統文化」教育をテーマとするネットワーク構築をめざし2008年3月から逐次実施するアジアの提携校訪問第一弾として、3月3日～3月6日の日程でインドネシア・バンドゥン所在のインドネシア教育大学を公式訪問しました。和やかな雰囲気の中で会談が行われ、教員・大学院生の相互訪問やプログラム評価委員会への参加について基本的に合意が得られました。この後も、3月19日～3月21日の日程で韓国・大邱所在の嶺南大学校、3月24日～3月26日の日程で中国・西安の西安外国語大学を訪問し、アジア教育大学国際交流ネットワークの名称にふさわしい相互連携を図っていく予定です。

■海外実地研修の実施

本教育プログラムでは、大学院生が実践体験や実地研修を通して獲得する知識や経験、そしてそれらを養分として培われる力量などを非常に重要視しています。

先述のインドネシア教育大学訪問に続き、3月6日～3月11日の日程でインドネシア・ジャワ島中部のジョグジャカルタ市とその近郊で大学院生の海外実地研修を実施しました。ジョグジャカルタ市近郊には世界文化遺産に登録されているチャンディ・ボロブドゥールやチャンディ・プランバナン等、7世紀～9世紀を中心とする仏教・ヒンドゥー教の寺院遺跡が集中的に所在し、正倉院宝物や高畑町所在の頭塔といった奈良の文化財や遺跡とも、中国などを経由しながら一部近接する様相を示していることがあらためて実感されました。大学院生の海外実地研修については、公開ミニシンポジウムやホームページ等で今後も継続的に発信していきます。

「地域と伝統文化」教育プログラムのモデル図



「世界遺産教育」の合同実践研究会の開催

–ユネスコ・スクールとしての地域貢献—

国際交流・地域連携委員会

秋山ユネスコ協力官の基調講演

平成20年2月23日（土）、「第一回奈良市世界遺産学習実践研究会　日本国際理解教育学会実践研修会　奈良教育大学ユネスコ・スクール教育実践研究会」が開催され、210名の参加者を得て、ESD（Education for Sustainable Development　持続可能な開発のための教育）と世界遺産教育への理解を深めた。

この研究会は、奈良市教育委員会の「世界遺産学習検討委員会」に、本学の田渕五十生教授が委員長、西山厚奈良国立博物館教育室長が副委員長に就任し、本学の森本弘一教授もメンバーの一人となったことに始まる。この検討委員会によって先に進められていた第一回奈良市世界遺産学習実践研究会に、本学が2007年7月にユネスコ・スクール（旧称ユネスコ協同学校）に加盟したことで、奈良市教育委員会・奈良国立博物館・日本国際理解教育学会に本学が加わって共催することとなり、奈良県教育委員会と（社）日本ユネスコ協会連盟、（財）ユネスコ・アジア文化センターの後援をいただいた。

実践研究会は、基調講演を中心とした全体会と実践報告の分科会の二つの形式で行われた。基調講演での概略は以下のとおりであった。

西山教育室長の基調講演

秋山ユネスコ協力官…「世界遺産教育」は教科や個々の課題の枠を越えた取組が求められる「総合的な学習の時間」の新しい教育課題である。

寺尾部長…奈良で先駆的に取り組まれている世界遺産教育は、各地域にある文化遺産教育へと拡大することで全国的に展開できる教育資源になる可能性を持っている。

西山室長…「古都奈良の文化財」は8世紀に生まれた。「いい物を作ろう。」「いい国を造ろう。」という思いが、人々の胸に著しく高揚した日本の青春時代であった。本当に素晴らしいものがあり、その学びができるのが奈良の子どもたちである。

◀ 奈良市平城西小学校の実践紹介

奈良市内の全小学校の5年生と中学校3年生の「総合的な学習の時間」で、地域の世界遺産にフィールドワークを行い、その成果をビデオレターやフォットメッセージなどで発信する実践が定着しつつあり、そのフィールドワークに協力するのが「ボランティアガイドの会・朱雀」のメンバーである。テーマがタイムリーであったために、市内の小・中・高等学校の先生方をはじめ、県外からの参加者やユネスコ教育に関心のある方々の参加も多く、会場に入り切れないほどの盛況であった。

報告された実践は、大きく「世界遺産についての教育」と「世界遺産を通しての教育」の二つに分けることができるが、どの実践も最終的には、自分たちの「地域を見直して、奈良という地域を愛するアイデンティティを育成すること」を目指すものであった。ESDを視野に据えた学習が行われており、大学・博物館・学会と連携した先駆的な学習モデルを提起するものであった。

最後に会議総括の中で、田渕教授は「世界遺産は観光資源だけでなく、豊かな教育資源である」と指摘して、「教育は研究とは異なり、他の実践者の優れたアイディアを参考にしてほしい。仲間の実践に学びながら実践の質を高めよう」と提案して会を閉じた。

プログラム

基調講演①	**「世界遺産学習とESDに期待するもの」** 文部科学省国際統括官付ユネスコ協力官　秋山　和男 氏 ユネスコ協会連盟事務局教育文化事業部長　寺山　明人 氏
基調講演②	**「奈良の世界遺産のすばらしさ」** 奈良国立博物館教育室長　西山　厚 氏

第1分科会

指定討論者・・・森本　弘一（奈良教育大学教授）・上田　啓二氏（奈良市教育委員会指導係長）

学校名	提案者名	提案テーマ
奈良市立済美小学校	大西　浩明教諭	『世界遺産のあるまち奈良』の「もの・こと・人」から
奈良市立田原小中学校	榎本　克之教諭	キャリア教育の視点から見た世界遺産学習
奈良市立椿井小学校	小島　源一郎教諭	私たちの世界遺産や校区を発信しよう

第2分科会

指定討論者・・・岩本　廣美（奈良教育大学教授）・山田　均氏（奈良県立教育研究所教科指導部長）

学校名	提案者名	提案テーマ
奈良市立平城西小学校	中澤　敦子教諭	世界遺産から平和を考えよう
奈良市立鼓阪小学校	西田　妙子教諭	世界遺産学習から地域を愛する心を育む
奈良市立三笠中学校	深澤　吉隆教諭	江戸時代の旅から奈良を再発見

第3分科会

指定討論者・・・今田　晃一氏（文教大学准教授）・木村　慶太教諭（広陵町立広陵中学校）

学校名	提案者名	提案テーマ
奈良県立法隆寺国際高等学校	祐岡　武志教諭	世界遺産教育とESDの関わりについて
奈良市立一条高等学校	藤村　智子教諭	ユネスコ青年交流2006・2007
奈良教育大学附属中学校	谷口　尚之教諭	「世界遺産を通しての教育」への試み

写真で見る大学120年

その1　明治期

①

明治21年（1888年）7月1日に創設された本学は、本年120周年を迎えます。11月22日には記念式典が行われ、他にも記念誌編集や記念講演会などの記念事業が計画されています。明治期、大正・昭和期、平成期の三回に分けて、「写真で見る大学120年」をお届けします。

明治21年（1888）7月1日、奈良県尋常師範学校が大阪府尋常師範学校より分離し創設される。事務所は県庁内に置き、校舎は奈良町大字登大路23番地。9月5日に事務所を校内に移し、その日より授業が開始された。生徒は大阪府尋常師範学校より移籍した43名で、10月16日に初めて生徒を募集、13名が試験生となった。体操教室で開校式を挙行した11月18日が、本学の開学記念日となっている。翌明治22年1月14日には附属小学校が創設され、11月1日に開校の運びとなった。明治31年には、奈良県尋常師範学校を奈良県師範学校と改称、明治38年4月1日には奈良県女子師範学校が創設された。

写真①は明治20年の旧県庁庁舎で、中央が寧楽書院の建物である（奈良県庁所蔵）。写真②は明治26年当時の校舎全景で、東大寺大仏殿が見える。写真⑦は時代がはっきりしないが、全景がよくうかがえる。運動場であろうか、ずいぶん広い。写真③は、附属小学校正門の様子。写真④は、同じ頃の撮影で師範学校職員及び教生の写真。山高帽子に口ひげの先生、後ろの方が教生であろう。写真⑤は師範の生徒5人で、明治36年の撮影。写真⑥は女子師範学校の生徒さん。明治末期の撮影であるが、いつの機会に撮られたものであろうか。

⑦

120周年記念事業については、本学ホームページ（http://www.nara-edu.ac.jp/ADMIN/SOUMU/nue120.htm）、または総務課（電話0742-27-9108）にお問い合わせください。また、学生支援及び国際交流充実のための募金に関しましては、会計課（電話0742-27-9110）にお問い合わせください。

②

③

④

⑤

⑥

酔歩と超群
―調和解析―

数学教育講座・教授
河上　哲

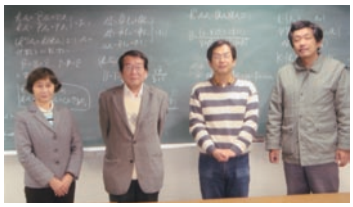
■酔っ払いは家に帰れるか？

大好きなお酒を仲間と呑んで、いい気分のまま家を出て、右に行くのも左に行くのも風の吹くまま気の向くまま、という父の姿。「6時間後に家に帰ってくる確率は…」と母の呟き。子供の頃、正月元旦によく見かけたこのような光景を、いろいろな図形（グラフ）の上や空間の中で考察する数学は、ランダムウォーク（酔歩、乱歩）と呼ばれています。そして、ランダムウォークと見事に調和している数学がハイパー群（超群）です。新しい数学の一つであるハイパー群の分野には未解決の問題がたくさんあり、ひとつひとつの問題の解決に向けて、学部の学生や大学院生たちとともに、毎週いろいろな計算を楽しんでいます。問題が解けた時には、「これで新しい数学の小さな扉がまた一つ開いた」と美酒で乾杯し、その喜びを分かち合っています。「生きた数学（学問）の体験と感動が、皆が教師になった時にはとても大切だ！」と主張できる幸せな日々を過ごしています。

■無限次元調和解析

20世紀に入って間もなく、量子力学と相対性理論が誕生しました。これらの数学的な側面を明確にしようと、作用素環論や表現論などの無限次元調和解析が生まれ、今も進展しています。ここでのキーワードは「無限」と「非可換」です。私の研究のホームグラウンドはこの分野でしたが、最近は「有限」と「可換」の世界に酔っています。今年は「要素の数（位数）が4の可換ハイパー群の構造を決定せよ」という問題に取り組んでいます。ホーム（家）にはいつ帰れるのだろうかと思いつつ…。

調和解析の仲間たち


研究仲間

３回生

大学院生と４回生

「自分で問い、考える」ことの難しさとおもしろさ

社会科教育講座・准教授
伊豆藏　好美

■哲学・倫理学は難しい？

「難しそうですね」。「哲学・倫理学」が専門だと言うと、よくこう聞かれます。大抵は「そうですね、でも面白いですよ」と答えます。ありきたりですが、これが長年「哲学・倫理学」を話と飯のタネにしてきた率直な感想です。

その難しさの一つは、「普通は常識として問題にしないことをあえて問う」という点にあるかも知れません。例えば、なぜ約束を破ってはいけないのか、人間は皆平等だとどうして言えるのか―など、世の中の良識が自明視してはいても、いざ問うてみると実はよくわからないことは山ほどあります。「正解」があるのかどうかさえ定かではありません。

■思想研究の醍醐味

そこで、過去の哲学者や思想家に相談せざるを得なくなります。もちろん、スッキリした答えが待っているとは限りません。ただはぐらかされたり、余計にわからなくなったり…という場合も決して少なくありません。でも気がついてみると、思いがけずこれまでとは別のものの見方や考え方を学び、物事をいくらかうまく捉えたり判断したりできるようにもなっています。大げさでなく、世界が違って見えてくることさえあります。

■学校教育について思うこと

権威が定めた一つだけの正解を目指して、効率と従順さを競うレースの中では、なかなかこういう面白さは味わえないかも知れません。大学の卒論に戸惑う学生が多いのも、それが初めての「自分で問い、考える」機会になるから、という笑えない現実があるからでしょう。学校を、しなやかでたくましい知性と感性をはぐくむための場所にするには、教員養成系大学がその起点とならなければ…と、最近の世の中の流れを見ていても強く感じます。

研究室での演習の様子

作曲家であることを生かした教育

音楽教育講座・准教授
北條　美香代

■作曲家とは？

「作曲家」と聞いてどんなイメージを思い浮かべますか？ピアノの前に座り、ああでもない、こうでもないと悩んでいる姿でしょうか？それとも電車の中でふと良い旋律を思いつき、ノートに書き留める姿でしょうか？

私の研究領域は「作曲」であり、自らも作曲家ですが、その実態はこれに近くもあり遠くもあります。悩みはしますが、ピアノの前ではなく机の上の五線紙と睨み合いながらです。頭の中で鳴っている音と向き合い、根気強くその音を写し取る作業を延々と続けます。ピアノは確認のために使います。また、良い旋律を急に思いつき…ということも、私の場合は全くありません。作曲と日常生活は切り離されているため、創作モードに切り替えないと、なかなか良い旋律は生まれてこないものなのです。

■作曲家への道のり

音楽創作活動は、作曲者の内的世界・感性の揺らぎを、音によるさまざまな起伏や抑揚を駆使して表出するものですが、そのための技術を自らのものとするには、生涯にわたる学びが必要になってきます。ベートーヴェンやバッハ等、過去の大作曲家たちの美意識を学ぶことで、少しずつ大作曲家との距離を縮めていくことができるのです。それはとても長く険しい道のりです。

■研究室での教育活動

現在私の研究室には、音楽教育と管楽器の学生が所属しています。作曲を専門に学ぶ学生はおりませんが、自らが作曲家であることを生かし、過去の作曲家の視点・美学をその譜面から読み取って演奏に生かす方法論を考えたり、作曲・創作活動を教育現場でどう生かしていくかを考えたり、試行錯誤しながらも楽しくゼミ展開しています。

ピアノの前で

自作オーケストラ譜面

身体に良い油脂を安全に摂るために

生活科学教育講座・准教授
杉山　薫

■身体に良い油脂とは

現在、さまざまな食用油脂が摂取されていますが、いずれの油脂も過剰摂取は害になります。適正な量を摂取している時、身体に良い油脂とはどのようなものなのでしょうか？一般に、油脂を構成している脂肪酸中の必須脂肪酸（食物から摂取しなければならない脂肪酸）の種類と量により、栄養学的価値が論じられています。栄養学的価値の高い油脂の摂取が望ましいのですが、そのような脂肪酸は酸化されやすいという欠点があります。さらに、酸化された油脂には毒性があります。

■油脂の酸化を防止するには

油脂の酸化防止のために、かつて使用されていた合成抗酸化剤は発ガン性の問題から使用が控えられ、現在ではα－トコフェロールなどの天然抗酸化剤が主に用いられています。油脂の酸化は、貯蔵状態の油脂そのもののみならず、食品中でも進行します。現在私の研究室では、油脂含有食品の酸化を、食品素材または成分で抑える研究をしています。ある種のタンパク質やガーリックなどの香辛料、コーヒー、ココア、茶類などにクッキーの酸化を抑える効果があることがわかりました。

■未利用食材を活用しよう

現在、ほとんど利用されていないもの（産業副産物等）の特性を活かした有効利用を試みています。前述の油脂の酸化防止では、米糠、小麦ふすまのほかに、奈良県特産葛粉製造の際の排水や、野に繁茂する葛葉の乾燥粉末に効果があることがわかりました。

他に、葛葉を添加して、見た目が鮮やかでハーブの香りがする食パンを作ることができました。思いもかけないものに有益性があるのでは？と研究を進めています。

葛根粉砕作業中

葛葉添加食パン

顧問一年生

奈良市立富雄中学校・教諭
大西　佐知
（平成18年3月教育学部卒）

バスケットボール…？

初任者として本校に赴任し、もうすぐ一年になります。学校では、授業や部活指導、成績等の事務処理、そして教材研究など、日々すべきことがたくさんあります。そんな毎日の中で、私にとっては部活指導が最も大きな課題です。

四月に女子バスケットボール部を任されました。バスケットは体育の授業で教えてもらったことがあるだけで、ルールもよくわかりません。知らないスポーツの指導なんて、全く自信がありません。しかし、体育館では部員たちが待っています。顧問がいないと、彼女たちは部活をすることができません。

顧問をすることには不安でいっぱいでしたが、今日から勉強して、彼女たちからも吸収しながら、顧問として部を引っ張っていくしかないと決意しました。しかし、決意はしたものの、わからないことだらけです。だから、バスケ雑誌や教則本、DVDなどを見て勉強したり、他の中学校と合同練習をしてもらって、その顧問の先生に教えていただいたりしました。

部員たちとともに

顧問をしていると、辛いことや悔しさで涙を流すこともあります。練習試合で自分の知らない戦法で攻められ、タイムアウトを取りました。肩を落としてベンチに帰ってくる彼女たちに、私は何も戦略を授けてやれないのです。自分の無知が情けなくて、また良いアドバイスもしてあげられなくて、悔しさでいっぱいでした。

もちろん、うれしいこともあります。試合に勝った時の彼女たちのキラキラした笑顔や、自分より大きな相手に必死でディフェンスをしている姿、相手チームからボールを奪い、5人で攻めてリングに入った時、ベンチの大きな声…。顧問をしていて良かったと思う瞬間です。こんな時間を、彼女たちともっと共有していきたいと思います。

これからも、何回も壁にぶつかるとは思いますが、彼女たちと一緒にバスケを続けていきます！

体育館で三年生と一緒に。

れ　こ　れ

パワーの源は、子どもたちの笑顔

奈良市立富雄第三小学校・教諭
藤田　圭衣子
（平成17年3月教育学部卒）

無我夢中の一年目

一年目、初めて担任する子どもたちの前に立った時、うれしさと同時にその責任の重さをズシリと感じたことを覚えています。一年間講師をしていたとはいえ、初めての担任にどうしていいのかわからないことばかりで、その日一日をこなすのに精一杯の日が続きました。そんな中でも、「学校は楽しい所だと感じて欲しい」という強い思いと、大好きな子どもたちの笑顔が私を支えていたように思います。

試練の二年目

一年目と同じ二年生の担任ということで、昨年よりは余裕を持って子どもたちと関わることができるだろうと思っていました。しかし、同じ学年でも子どもが違うと様子も全く違い、昨年以上に大変な毎日となりました。

思い通りにならないと暴れたり、教室を飛び出したり、暴言を吐いたりする子たち。目を離すとケンカが起こり、気の休まることのない日が続きました。正直「もうダメかも…」と思う日もありました。でも、子どもたちの「先生、学校楽しい！」という言葉と笑顔に、そして同僚の先生方に支えられて頑張り続けることができました。

この二年間で学んだことは、子どもたちの力を信じる大切さです。何か起こった時、なぜそうなったのか、どうすれば良かったのかをみんなで考え続けました。その積み重ねで、お互い理解し合うことができました。トラブルも減り、何か起こっても子どもたちがうまくフォローし合える関係ができつつあります。大変だった分、今の成長した子どもたちの姿がうれしくて仕方がない毎日です。そして、私も子どもたちにずいぶんと成長させてもらいました。

これから先、どんな時でも子どもたちの力を信じて、子どもたちとともに成長していける教師でありたいと思っています。

朝の会

鳴り止まない電話の中で

京都市児童相談所・児童福祉司
稲垣　紀夫
（平成14年3月教育学部卒）

『児童相談所の仕事』

京都市で心理職員として採用され、現在は京都市児童相談所で働いています。全国で起こっている児童虐待事件により、児童相談所が話題に上がることも増えました。京都市内でも、虐待の相談件数は毎年増加し続けています。児童相談所は、虐待の相談だけではなく、保護者の入院・失踪に関する養護相談、触法行為・家出・家庭内暴力に関する非行相談、児童の性格や行動に関する育成相談等を受けています。児童福祉法の下、最も適切な相談援助方法を検討して18歳未満の児童の福祉を図るとともに、その権利を保護することが私達の仕事です。

『連携の大切さ』

私は児童福祉司として、河原町通や四条通などがある中京区と、清水寺で有名な東山区の相談を担当し、さまざまな調査を行っています。仕事をする中で大切になってくるのが、学校や福祉事務所、保健所、病院、施設等の各関係機関と連携することです。児童相談所で解決できると期待されていても、実際にできることには限りがあり、各機関が協力し合っています。しかし、保護者や関係機関から児童相談所に求められていることに応えられず、ニーズの差や見方の違いに悩まされることが多いのも現実です。

『やりがい』

相談件数は増えていますが、職員の数はまだまだ足りておらず、職員一人ひとりが膨大なケースを抱えています。途切れずに鳴り響く電話と、いつ何が起こるのかわからない緊張感の中で、力を合わせて頑張っています。困難がある仕事だからこそ、その分やりがいも大きいと思います。子どもの笑顔が見られた時は本当にうれしくて、私自身が力をもらっている瞬間です。

相談室の前で

ひと・あ

ステップアップを目指して

京都銀行久津川支店　溝口　万里子
（平成18年3月教育学部卒）

京都銀行で働く魅力

社会に出てから、はや二年。私は日々お客様と接する毎日を送っています。昨年の秋から、銀行の「顔」としてお客様と応対する窓口業務を担当しています。最近では、お客様が通帳やカードを紛失されたり、住所変更されたりする場合の手続き等、幅広い業務をさせていただいています。

京都銀行は、自分の意思で昇格を希望して、女性でも主任や役席として活躍できる職場なので、ステップアップを目指して日々頑張ろうと思っています。人間として女性として、もっと成長したいというキャリアアップを実現できる場であると考えています。

大切なのは、お客様との信頼関係

大学時代の忘れられない経験といえば、実際に生徒と触れ合った教育実習です。実習では、生徒とのコミュニケーションを図り、信頼関係を築いていくことこそ最も大切なことではないかと感じました。「目を真っ直ぐ見て話すこと」が、相手に気持ちを伝える手段だと学びました。

当時は、子どもと接する仕事に就きたいと考えていましたが、今は比較的年配のお客様とお話しする機会が多い毎日です。しかし、変わらないのは「物」ではなく「人」を相手にする仕事だということ。お客様からの「ありがとう、あなたに相談して良かった」…この言葉で、今日も一日頑張ろうと意欲が沸きます。自分にしかできない接客方法で、マイカスタマーを増やしていきたいと考えております。

職場で

目指すは、頼りになる個人金融アドバイザー

今後は、お客様の資産運用のアドバイザーとして、仕事の幅をさらに広げていきたいと考えています。お客様のライフプランに合わせて、社会情勢や金融の動きなどと照らし合わせながら、ニーズに相応しい金融商品や運用プランの提案を行っていきたいと思います。京都銀行に関わる全ての方と、今後も“なが～いおつき合い”ができたらなと思っています。

幼稚園

ひとりひとりが輝く保育をめざして

附属幼稚園・副園長　上野　由利子

他園の先生方との学び合い

附属幼稚園では、「ひとりひとりが輝く保育をめざして」というテーマを掲げて、11月17日(土)に公開保育研究会を開催しました。土曜日とあって、園内研修として全教員で参加された園もあり、近畿圏を中心に280名の参加を得ました。

幼稚園は、様々な子どもたちがともに学ぶ最初の学校です。中には、集団の中に入りにくい子どもや、友達とコミュニケーションをとることが苦手な子どももいます。幼稚園では一人ひとりのニーズに合わせた教育を行うのが基本ですが、特別な配慮を必要とする子どもも含めて、すべての子どもたちが生き生きと自分の力を発揮できるような保育を目指して、参加の先生方と学び合いました。

おはようたいそう

どろだんご

身体を目覚めさせる体操

附属幼稚園は、朝の体操で始まります。子ども自身が自ら遊びを見つけ、積極的に活動するためには、心も体も十分に目覚めることが大切であると考えています。全園児が登園する頃を見計らって、身体を思い切り動かす時間を設けています。お腹から大きな声を出すことも身体を活性化すると考え、声をかけ合う動きを組み込んでいます。

自然環境を生かして

本園には豊かな森があり、自然環境に恵まれています。秋は特に、本園の良さを生かした保育が展開されます。三歳児は大きなクヌギの下でおやつを食べたり、絵本を読んでもらったりしました。四歳児は、木の枝や赤い木の実を使った壁飾りや、ジュズダマの腕輪を作って遊びました。五歳児は、自然環境センター教授でもある園長先生の指導を受けながら、マテバシイやシイの実をホットプレートで焼いて食べました。「こうばしくておいしい」という子どもたちの発言に、周りで参観しておられた先生方も思わず手を伸ばし、「ドングリってこんなに美味しいんですね」と感動しきりでした。

保育室に展示している子どもたちの作品を前に、熱心にメモをとる先生の姿も見られました。附属幼稚園の保育実践を知っていただき、多くの先生方と交流できた一日となりました。

小学校

みんなの学校

―教えと学びの公共性を求めて―

附属小学校・副校長　坂下　伸一

教育研究は36回目?

附属小学校の教育研究会が、昨年11月17日に開催されました。毎年行うことを基本としており、今回で36回目になります。「それでは、どうして36回目戦後60数年たっているのに、回数が少ないのではないのか?」と思われることでしょう。附属小学校では、創立(118年前)当初より、教育研究会をずっと大事にしながら開催しています。戦後も教育研究会を始めたのですが、1965年にそれまでの附属小学校の教育のあり方を大きく見直して、教育研究会に臨もうということにしました。そこで、その年の教育研究会を、新しい研究会という意味で第1回としたそうです。

研究テーマの意味

今年度の教育研究会のテーマは、『みんなの学校 ―教えと学びの公共性を求めて―』でした。少し難しいかも知れません。今学校教育は、学力の問題やいじめ、不登校など、いろいろな課題を抱えています。その中で大切なのは、学校教育は上から押し付けられた形で進めていくのではなく、子どもと教職員はもちろんのこと、保護者や地域の住民も含めみんなで創っていくということだと思います。「学校の課題はみんなで力を合わせて解決していくものだ」という考えが『みんなの学校』というテーマの意味あいです。『教えと学びの公共性』には、「授業を中心とした教育

実践についても、子どもと教員とで創り出していくものであり、授業内容もすべての子どもが学ばなければならないものにする」という主張が込められています。

教育研究会の様子

当日は、公立学校の教員や大学の教員、学生など300人近くの人たちが全国から集まってくださいました。午前中は「公開授業・研究授業と討議」、午後は「学力を考える分科会」ということで、低・中・高学年と特別支援学級の分科会で、本校の報告と討論が熱心に行われました。今年は「通常学級にいる特別なニーズを持つ子どもの教育」の分科会も設定しました。予想以上に多くの方に集まっていただき、この教育の関心の高さを感じました。

来年度も11月に教育研究会を開催する予定です。ぜひ、参加してください。

中学校

ESDの理念の実現に向けて

附属中学校研究推進部・教諭　竹村　景生

11月2日（金）、約200人の参加を得て本校の研究会が行われました。本年度の研究テーマは「ESDの理念にもとづく学校づくり～ESDを視野に入れた授業研究～（第2年次）」です。昨年度創立60周年を記念して記念誌を作成しました。その記念誌作成の作業の中から、各教科ならびに本校の教育活動全般の歴史的な経過をつぶさに振り返ることを通して、私たちは教科を主体とした先輩教員たちの実践や、生徒たちと紡いできた特別活動や総合の積み上げ（文集など）の歴史があって、今回のESDに続いていく気づきを促し、テーマとする確信を得たのだと思います。

ところで、今回の研究会の成果を五点にまとめてみました。

①研究会テーマを『未来の地球市民を育てる教育』と設定し、そのテーマの教育現場への具現化として、各教科が提案型の公開授業ならびに研究報告を行うことができた。（全校ならびに全教科がESDをテーマとする義務教育学校は、現在国内で本校だけである。）

②ESDのテーマが縁で、奈良市教育委員会から本研究会への呼びかけが行われ、多数の参加が得られた。

ESDに取り組もうとする奈良市との地域連携が今後も継続されていく契機となり、地域教育への貢献の一端を担うことができた。

③ESDというテーマが、教職員のみならず、地域で活動されているNPO関係者や、NPOに参加されていたり関心を持っておられる、本校PTA関係者や学生といった、幅広い層からの参加を得られた。

④中教審が、「総合的な学習」の時間を削減し、教科の時間数を増やす方針を打ち出したが、教科から発想しつながっていく私たちのESDの実践は、この間の「総合」の蓄積を壮大なムダとして単純に「学力」論で切り捨てるのではなく、その発展的な展望をもって、増やされた教科時間数に活かしていけるよう、戦略性をもって実践現場に提案できる内容である。

⑤今回の集録原稿のほとんどが、各研究会や学会等で発表されたものである。質的な高さとともに、ESDへの啓発と広報、また今後の本校教育研究への関心や要求といった、相互交流的な対話をつくり出していく実践研究へと、附属中学校は踏み出したと言える。

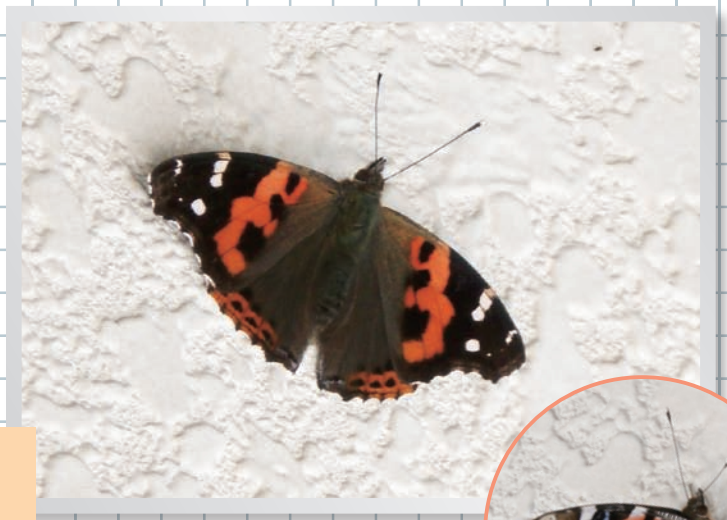
午後の講演会は、永田佳之氏（聖心女子大学）による「ESDの理念による学校づくり」の講演が行われ、質疑応答も盛り上がり、会場参加者は有意義な時間を共有することができました。

研究会の打ち合わせや共同研究などで、大学教員との連携ができつつある中、今後の課題としては学生が参加しやすいように、実習内容の一講座として附属の研究会が位置づけられることを、早急に検討していただけるよう願っています。

当日は柳澤学長をはじめ、分科会での指導や助言など、多数の大学教員の協力・参加をいただいたことを、この場を借りてお礼申し上げます。また、研究会の運営に学生諸君が活躍してくれたことも、この場を借りて報告しておきます。

なお、研究集録を希望される方は、研推部・竹村（takemura@nara-edu.ac.jp）までご一報ください。

大学の仲間たち



和名　アカタテハ
学名　*Vanessa indica*
分類　タテハチョウ科
（鱗翅目、昆虫綱）
翅開長　60mmくらい

アカタテハ

翅（はね）を広げると6センチメートルぐらいの中型のチョウである。翅の色から「派手」というイメージを与えるタテハチョウ科に属する。この科のチョウの中でも、〝○○タテハ〟という名前のチョウは、翅が赤、青、黄色とすぐにそれとわかる特徴を持つ。本種は赤が目立つチョウであり、前翅の先は黒色、中に白い帯と内側に赤い帯があり、一番内側は褐色である。後翅は褐色であるが、外側に沿っては赤色帯がある。本学では、このチョウを時々しか見かけないが、秋も深まった小春日和の日や早春など、あまり他のチョウを見ない季節が多く、さらに赤い色も目立つので強く印象に残る。これは、このチョウが成体で越冬するためであり、春でも晩秋でも、さらには冬季でも、暖かい日には飛び出してくる。飛び方は素早いので、通常は捕獲が難しい。幼虫はカラムシとかヤブマオを食べて育つ。学内ではヤブマオを食べているのではと思っているが、まだ確認していない。

（自然環境教育センター長　前田喜四雄）

URL http://www.nara-edu.ac.jp/ECNE/index.htm

奈良教育大学　広報誌
第27号　平成20年3月24日　編集／広報・情報公開委員会　発行／国立大学法人奈良教育大学
〒630-8528 奈良市高畑町　TEL. 0742-27-9105　FAX. 0742-27-9141
http://www.nara-edu.ac.jp　kouhou@nara-edu.ac.jp